

# 《楽曲解説》

解説＝野本由紀夫

7/16 第95回東京オペラシティ定期シリーズ

7/17 第867回サントリー定期シリーズ

マーラー (1860-1911)

## 交響曲第9番(改訂版)

グスタフ・マーラーが死の前年の1910年に完成させた、最後の交響曲。『大地の歌』、第9番、未完成に終わった第10番をあわせて、しばしば「告別三部作」と呼ばれる。

三つはたがいに主題メロディが似ているだけでなく、「別離、死、浄化(変容)」という共通の内的プログラム(標題性、つまり表現内容に規定された形式プロセス)も含んでいる。とりわけ第9番は、死の予感に満たされている。

### 悲劇の始まり

1907年、悲劇は始まった。同年1月、ウィーン各紙はウィーン宮廷歌劇場総監督マーラーの批判をいっせいに書きたて始めた。マーラーは転職を真剣に考えるようになり、6月21日、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場と、秘密裏に正式契約を取り交わした。

その後、7月12日、溺愛していた長女マリアが、猩紅熱とジフテリアの合併症により5歳たらずで急逝。妻アルマに「縁起でもないからやめて」と懇願されたにもかかわらず『亡き子をしのぶ歌』(1901-1904)を作曲したからだ、と彼

は思い悩むようになる(このことが第9番の最終楽章の伏線となる)。

まもなく、彼自身にも重篤な心臓病が発見された。こうした状況下で、マーラーは宮廷歌劇場の監督の辞任を願い出て、ウィーンを去ることになった。

翌1908年1月1日、マーラーはニューヨークでワーグナーのオペラを振って華々しくアメリカ・デビューを果たした。ところが、4月には、彼を招聘した総支配人が破産して、退職。メトロポリタンの理事会が、新しくトスカニーニ(1867-1957)に就任を要請する方針であることを察知したマーラーは、争わずして身を引くことを決心した。

これ以後、マーラーはオペラ指揮者から、コンサート指揮者に軸足を移すことになった。その活動の中心は、当時、経済的苦境にあえいでいたニューヨーク・フィルである。マーラーの指揮に感激した社交界のマダムたちが同フィルを買収して、マーラーに活躍の場を与えたのだった。

### 運命の数「第9」

平均して週2回という超多忙な演奏

活動に明け暮れて、作曲はやはり夏休みしかできない。とはいえ、1900年以來「作曲小屋」としてきたマイエルニヒ(オーストリア南部ヴェルト湖畔)は愛娘の思い出が詰まりすぎており、とてもいたたまれず、マーラーは1908年に南チロルのトブラッハ(現ドビアゴ)の農家に作曲の拠点を移した。その家で「告別三部作」が完成されることになる。

長女マリアの亡くなった直後の夏休みから、マーラーは第8番『千人の交響曲』(1906)につづく交響曲として、『大地の歌』を作曲し始めていた。

マーラーは「第9」という「運命の数」を怖れていた。ベートーヴェンもシューベルトも、ブルックナーもドヴォルザークも、巨匠たちは交響曲「第9番」を書いて亡くなった。

しかし、皮肉なものである。強力な「生の肯定」をテーマとする第8交響曲と、本日演奏される「第9番」のあいだに『大地の歌』をはさんでしまったために、「第9番」は結果的に、本当に最後の完成された交響曲となってしまった。

### 第9番の作曲と「死」

交響曲第9番は、1909年6月にトブラッハで作曲が始められ、夏休みが終わるころまでにはあわただしく下書きが終わっていたようだ。しかし彼には、次の夏休みまで作曲を待っている時間はな

かった。11月から翌年3月までのシーズン中44回も演奏会をこなしながら、寸時を惜しむようにして作曲は続けられ、1910年4月1日に第9番は完成した。

精神的に言って、もともとマーラーに「死への期待」「破滅願望」があったことは事実であろう。それは第6番『悲劇的』の英雄を倒すハンマーなどにも見てとれる。しかし、愛娘の急死と自身の心臓病は、「死」をもっと身に迫った問題として突きつけたと思われる。

マーラーに残された時間はわずかだった。第9番完成後、妻アルマ(1879-1964)と建築家グロピウス(1883-1969、のちのバウハウスの創立者)との不倫が発覚。アルマとの関係が急速に悪化すると、マーラーはうつ状態となり、精神分析医フロイトの診察を受けた(今日風にいうと、カウンセリング)。

ストレスが心臓に良いわけがない。心臓の治療も受けたが、1911年5月18日、マーラーはウィーンで帰らぬ人となった。現在は娘の墓の隣に埋葬されている。

第9番の初演は、没後1年を経過した翌1912年6月26日に、ブルーノ・ワルター(1876-1962)が指揮するウィーン・フィルの演奏により、ウィーンで行われた。

第1楽章 アンダンテ・コモド 演奏

に30分近くかかる、巨大な楽章。大幅に変形されたソナタ形式である。

参考までに、指揮者ヴィレム・メンゲルベルク(1871-1951)はこの楽章を、「彼の最愛の人々への別れ(妻や子供——この上なく深い悲しみに満ちた)」ととらえ、バーンスタイン(1918-1990)は「優しさ、情熱、そして人間を愛することへの別れ」と解釈していた。

冒頭からいきなり提示される「タータ、ンター」というリズム(チェロとホルン)は、重要なリズム主題である。バーンスタインはこのリズムをマーラーの「不整脈の音楽化」と解釈している。すぐにハーブで奏される「ファララシムラ」も楽章を通して現れ、最後には「吊いの鐘」を表すことになる。

第7小節から第2ヴァイオリンで主要主題が奏されるが、その出だしの「ファミ— | ファミ—」という旋律は、『大地の歌』の終曲「告別」において「永遠に!(ewig)」という歌詞がついていた。

この楽章は、何度も寄せては返す、「生と死」をめぐる激しい闘いであるかのようだ。金管楽器の咆哮とシンバルを加えて「魂の叫び」が頂点を迎えたあと、初めてタムタム(中国のドラのような打楽器)が鳴らされる。タムタムは「死」の象徴楽器だ。

その後、18分ごろ(第314小節)にはとうとう最大のクライマックスを迎え、「不

整脈リズム」がトロンボーンの *fff*(最強音)にタムタムまで加えて、「最高度に暴力的に」(楽譜の指示)奏される。これによって、主人公はまさに「死を宣告」される。

ついに本当に本物の鐘で「吊いの鐘」が登場すると、第2ヴァイオリンによって「永遠主題」が奏されて、再現部となる。フルートやピッコロには楽園の鳥の声も聴こえるようだ。音楽は平穏で浄化された天空のなかで、最後はあたかも心臓が停止する直前に大きく鼓動するかのよう「永遠主題」が何度も繰り返されて、消えてゆく。

**第2楽章 緩やかなレントラー風のテンポで** 大きく3つの部分と結尾(コーダ)からなる3拍子の楽章。メンゲルベルクは「死の舞踏」と解釈している。

テンポ I の主部は、緩やかなレントラー(ワルツの前身となった舞曲)で、おどけた表情の音楽。急に速度を上げたテンポ II の部分は、エネルギーなワルツ。お祭り騒ぎに急ブレーキがかかって、テンポ III の部分となる(中間部=トリオに相当)。ここでも「永遠主題」が聴こえる。

以下、テンポ II と III の舞曲、最後にテンポ I と II が再現される。最後にまったく唐突にコーダとなるが、ユーモアにあふれた楽章である。

**第3楽章 ロンド・ブルレスケ** 楽譜

には「きわめて反抗的に」と表情指示が書き込まれ、パロディやカリカチュア(風刺画)ふうの皮肉に満ちた音楽。メンゲルベルクは「最後のユーモア——創作、創造、すべては死から逃れるためのむなしい努力」ととらえている。

この楽章は、冒頭の闘争的な主題[A]が何度も回帰してくる。突然 *p*(弱音)になって、トライアングルの響きが聴こえたら第2部分[B]である。シンバルの一撃とともに、ふたたび闘争的な[A]が回帰する。トライアングルの音とともにふたたび音が静まっていくと、今度はグロッケンシュピール(鉄琴)の音色が特徴的な[B]となる。

その後フーガがあり、シンバルの一撃とともに急に音楽が静まると、トランペットの弱奏が印象的な天上的な箇所差しかかる。ここに交響曲第3番の第3楽章の「はるか遠くからの音楽」におけるポストホルンなどの残響を聴き取ることもできよう。この旋律に含まれるファラソムファムファという、波打つような音型は、次のアダージョ楽章できわめて重要な役割を果たすことになる。

ふたたび強力な[A]が再現されると、狂乱状態のまま幕切れとなる。

**第4楽章 アダージョ** 最終楽章では「命の死」「死そのもの」が表現されているようだ。ヴァイオリン群で始まる冒頭部には、第3楽章にも出てきたララシム

ララソラとかドブレドシアドなどが次々と出てくる。

この音型こそは、私が「生への執着モチーフ」とみなしている旋律型なのだ。この音型は、しばしば指摘されるように、ワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』の「愛の死」とそっくりだ。

この楽章はこの、生への執着を示す *ff*(最強音)の音楽[A]と、それとは対極にある *pp*(最弱音)の瞑想的な部分[B]が交互に出てきて進行する。バーンスタインはこの[B]部分のことを「東洋的」とか「禅の境地」、「幽体離脱の試み」などと表現している。

特にハーブが登場する天国的な響きの部分では、「作曲者は肉体を捨て、現実を離れて宇宙の一部となり、自我を持つこともやめる」と述べている。

しかし作曲者はまだ「無の境地」に達することはできず、激しい生への執着が三度襲う。突然、ヴァイオリンのみによって、変ハ音が強奏されるが、これはこの交響曲の冒頭にチェロとホルンで奏された「不整脈リズム」(タータ、ンター)にほかならない。

なお生への未練は断ちがたく、マーラーは最後の抵抗を試みる。それもついに力尽き、死を穏やかに受け入れていく。

恐るべき *pp*で満たされた、弦楽器群だけによる最後の5分間は、作品解釈の

重要な点だ。ここで第1ヴァイオリンは、『亡き子をしのぶ歌』の第4曲の最後の部分を引用している。「彼ら(子どもたち)はひとあし先に出かけたただけだ。

そして、もう家に戻ることはないだろう。

私たちは、太陽の輝くなか、あの丘の上で彼らに会えるだろう。

今日、あの丘の上はすばらしい天気だ!」(野本訳)

交響曲第9番のフィナーレで使われているのは、太字の歌詞の部分である。先述したように、アルマの予感は的中し、『亡き子をしのぶ歌』の作曲後に長女マリアは5歳足らずで亡くなる。第9番を書いていたとき、マーラーはその悲しみから脱しきれていなかった。第9番の完成3カ月前には、ニューヨークで『亡き子をしのぶ歌』を指揮しているだけに、ふたたび悲しみが襲ったかもしれない。

マーラーがこの交響曲で最終的に到達した「死」を容認する境地とは、「あきらめ」だったのだろうか。それとも、禅宗でいう「悟りの境地」だったのだろうか。まさに全曲の最後の小節に、マーラーは次のような発想記号を書き入れている。「ersterbend(エアシュテルベント)——

死にゆくように」。

その後訪れる吸い込まれそうなほどの深い沈黙。死は「終わり」ではない。未来へと続く「永遠の時間」のはじまりでもあるのだ。

[楽器編成] ピッコロ、フルート4、オーボエ4(4番はイングリッシュ・ホルン持ち替え)、エス(Es)・クラリネット、クラリネット3、バス・クラリネット、ファゴット4(4番はコントラファゴット持ち替え)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ(2奏者)、大太鼓、小太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール、低音の鐘3(F#、A、B)、ハープ2、弦楽5部

のもと・ゆきお(音楽学) / 桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部芸術教育学科教授(音楽史、鑑賞理論、指揮法)。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」の元監修・解説者、同「ららら♪クラシック」のららら委員長、Eテレ学校番組「おんがくブラボー」番組委員。「題名のない音楽会」にも出演。